

鴨東通信

秋

2010.9 No.79



●知られざるファイル①

上田秋成と大枝流芳

廣瀬千紗子

●てーたいむ

海をとおしてみた歴史

松浦 章

●エッセイ

絵本作家・居初つなの発見

石川 透

おそまぎの夢―後鳥羽上皇論上梓―

谷 昇

●リレー連載 世界のなかの日本研究4

微笑みの国の日本研究

岩井茂樹

●史料探訪

南方熊楠「履歴書」

中瀬喜陽

東京国立博物館古典籍叢刊

九条家本延喜式 (全五卷)

第一回配本 (一) 巻一・二・四・六・七甲・七乙 [10月刊行予定]

▼A5判・四六〇頁／定価一五、七五〇円

本書の特色

- ・東京国立博物館所蔵の国宝・九条家本延喜式を、紙背文書も含めて写真版で影印出版
- ・FMスクリーンによる高精細印刷。朱書きがある箇所は二色刷とした
- ・紙背文書には新撮の高精細画像を使用
- ・第五回配本に九条家本延喜式の解説と紙背文書全点の翻刻を付す
- ・写真版に延喜式の条文番号を示した
- ・紙背は横長で掲載し、できるだけ一文書を一頁でみるようにトリミングを工夫した

続刊 平均五〇〇頁・予価(各)一五、七五〇円

- (二) 巻八・十一 平成二二年一二月刊行
- (三) 巻十二・十三・十五・十六・二十・二十二 平成二三年三月刊行
- (四) 巻二十六・三十一 平成二三年六月刊行
- (五) 巻三十二・三十六・三十八・三十九・四十二 平成二三年九月刊行

東京国立博物館古典籍叢刊 続刊予定

「次回」元暦校本万葉集 刊行時期未定

編集委員

- 島谷弘幸 (編集委員長・東京国立博物館)
- 高橋裕次 (東京国立博物館)
- 田良島哲 (東京国立博物館)
- 富坂賢 (東京国立博物館)
- 田島公 (東京大学史料編纂所)
- 月本雅幸 (東京大学人文社会系研究科)
- 吉岡眞之 (東京大学史料編纂所)

寛政五年（一七九三）六月、大坂から妻の故郷京都へ移住

した秋成は、知恩院門前に居を構えると、翌六年十一月に『清風瑠言』二卷（以下、瑠言）を出版した。酒が苦手な茶に傾倒し、以前から蘊蓄はあったらしい。序文を書いた村瀬

梯亭は、向かいに住む煎茶好きの儒学者で、「（秋成の）居るところ筆硯の外、茶具数事のみ。蓋しその茶を好む也」という。つましく暮す秋成の煎茶は清貧そのもの。生来、剛直にして脱俗の気性をもて余し、ひたすら創作と学問に打ち込んで、煎茶を生涯の心の慰めとした。

香道御家流の大家、大枝流芳の『青湾茶話』三卷（宝暦六年一七五六）刊。のち『煎茶仕用集』。以下、茶話）が我が国煎茶書の嚆矢だろう。『瑠言』が『茶話』に拠ること一目明白で、見出し語、引用の中華茶書など、事物について多くを踏襲するが、叙述の趣きは微妙に異なる。最たるものは『瑠言』の「茗戦」、『茶話』にいう「闘茶」である。対して『瑠言』には「茗戦闘茶の遊戯。宋の代の文人盛に玩べ

知られざるライバル①

上田秋成 と 大枝流芳

廣瀬 千紗子

り。勝敗の気、必ず俗情を惹くべし。点茶家に茶歌舞妓と呼ぶも、清雅ならぬ名目なるにておもふべし。烹点共に気味の感、精妙に至らざれば、客に不慧の敗をとらしむ。君子の遊びにあらざるべし」と数行のみ。趣旨もまったく相容れない。

秋成晩年の好随筆『茶痕醉言』に「浪花の大枝流芳は富家の子にて、弱きより風流をこのみたる畸人也。茶を闘かせ、器をえらふは、翁（注・売茶翁）に勝れり」とあり、異文には、高価な器を賞し、静かな風致はあるが、「隠逸の興は疎き」とも評す。『茶話』自体、著者没後の出版であり、秋成も『瑠言』の〈水〉について誤認のあったことを、後年になって悔やむなど、問題は残るが、『瑠言』と『茶話』は、似て非なるものではなかったか。

大枝流芳には文房具、投扇興、花結びなどの、雅遊の指南書『雅遊漫録』七卷（宝暦十三年一七六三）刊。以下、漫録）があり、このうち煎茶だけを先に出版したのが『茶話』である。

『茶話』ならびに『漫録』の序文は、秋成の師、都賀庭鐘の筆。気になるところである。（ひろせ・ちさこ） 同志社女子大学教授

●偶然か必然か——日中関係史との出会い

——松浦先生は海を舞台とした歴史研究に長く取り組み続けてきました。そうした研究をはじめるときは何だったのでしょうか。

きっかけは、関西大学（関大）に進学したことです。当時は研究者になりたいなどとは思っていませんでしたが、引退のない仕事をしたい、死ぬまで好きなことをつづけられたら、とは思っていました。それで進学したのがたまたま関大だったのです。

最初は理系の勉強がしたかったのですが、物理がからきし駄目で、少し成績が良かった世界史に進もうと考えました。当時、関大の専門課程は三年生からでしたから、入学後二年間、東洋史、西洋史の間で悩みました。西洋史概説は原弘二郎先生が担当し、ビスマルクの話をされて大変面白かったのですが、完璧すぎてこれ以上何かする余地がないように感じました。一方東洋史のほうは大庭脩先生でした。先生は「素人でもできる東洋史」といっておられて、それを素直に信じて東洋史をとることにしました。

ちょうどそのころは、大庭先生が『江戸時代における唐船持渡書の研究』（関西大学東西学

ていーたいむ

海をとしてみた歴史

まつ うら あきら
松浦 章

（関西大学文学部教授）

術研究所、一九六七年）を出してすぐ後くらいで、特殊講義でもその話をされていました。その後、先生が長崎などで集めてこられた史料の整理をお手伝いしているうちに、中国の商人の名前がいつぱい出てくることに気づいたのです。「これはなんだろう」ということで調べ始めたのが研究のはじまりです。卒業論文では日清貿易に関係した山西商人のことを調べました。

これは面白いと思って大学院へ進むことになりましたが、そのころ関大の大学院には「日本史学」しかありませんでした。東洋史・西洋史の先生は、「日本史学」に所属してそれぞれ「日中交渉史」「比較文化史」の講義を持つという状況でした。わたしの場合は日本近世史に入り、指導教授は石門心学（いしもんしんがく）の研究で有名な柴田實先生でした。

修士のときはちょうど大学紛争のただ中でしたから、学生同士で勉強会を開いたりしながら修士論文を仕上げました。ところが関大には史学の博士課程がありませんでした。それで二年間は聴講生になり、関西大学の『史泉』という雑誌に論文を投稿するという生活をしていました。そのうちに後期課程を作ることになり、大

庭先生に誘っていただきました。ただし、できた後期課程も「日本史学専攻」で、その東洋文化史専修に入りました。

そういうわけで、最初は中国と日本との貿易関係を研究していました。東洋史の先生のなかには、「日中関係ばかりやっていないで中国の中心のことをやりなさい」などという方もいましたが、もし関大に東洋史があったらわたしの研究は変わっていたかもしれません。日中関係史をやらざるをえない状況だったから今があると思います。

●史料収集と現地調査

大学院で「日中関係史」に取り組むことになりいろいろ試みたのですが、山脇悌二郎先生の『長崎の唐人貿易』（吉川弘文館、一九六四年）を超えるような研究がなかなかできないと悩んでいました。

そんなときに、大庭先生が京都大学におられた東洋史の佐伯富先生を紹介してくださいました。はじめ「日本史の学生が来た」ということで驚かれたようでしたが、事情を説明するといろいろとお話をしてくださり、先生のノートも見せてくださいました。そのノートは、清の実録の抜き書き史料集でした。当時は今のようなデータベースなどない時代でしたから、自分できちんと史料を読んで調べなければならなかったのです。そのノートをお借りするわけにはいきませんから、私も真似してみることにしました。

幸いなことに関大の図書館には『清実録』がありました。それ

で図書館に籠もって乾隆時代六〇年、一五〇〇巻の史料抜き書きに取り組みました。ちょうどその年は大阪万博の年だったのですが、わたしは万博に行っていません（笑）。

はじめての海外調査は一九八一年でした。陶磁の研究で有名な三上次男先生が団長で、大庭先生・斯波義信先生^{しばのぶ}などを中心とした調査団に加えていただき、上海・福州・廈門^{アモイ}などの現地調査をする機会がありました。その当時、こうした地域の港にはまだ古い形式を残した帆船が残っていました。もちろん大きさは清代の物よりもずっと小さいのですが、それまでは史料で読んだり、せいぜい江戸時代の版画などで見たりしただけだった船が、目の前で動いているのを見て感激したものです。

このときの帆船をみた経験はとても大きな財産になりました。以来、学会などで中国に行ったときには必ず港のある場所を探して回っていて、沿海部の主な場所は大体回ったと思います。わたしの研究は文献史料を軸にすえてはいるのですが、実際に船が漂着した港を見て回った経験は、研究のなかに確実に生かされていると思います。

それから、このイメージをもって沖縄の『歴代宝案』や日本・朝鮮の史料から漂着した中国船の記録を探し、抜き書きをしていきました。漂着船に関しては、とにかく体系的な史料がありません。だからいろいろと論を立てる前に、まずは史料を集めなければならぬのです。それぞれは断片的な史料ばかりなのですが、それらを集めてみると、パズルと一緒に、なんとなく全体像

が自分なりにわかってきました。それからはいよいよ海の歴史にのめり込んでいきました。

こうした史料の制約もあってわたしは史料の収集や整理に力を入れてきましたが、これには大庭先生の影響もあると思います。

先生のように戦争中に教育を受けた先生方は、戦争に負けてから世の中の論調が一八〇度変わったということを経験しています。中国は毛沢東主義から大きな転換を経験しましたし、日本にも皇国史観から戦後史観への転換がありました。理論は社会が変われば変わっていきますが、史料は改竄^{かいざん}でもない限り、あとあとまですっと価値を持ちつづけます。歴史は理論の積み重ねではなくて具体的なものごとの積み重ねだと思っています。

関大の東西学術研究所では大庭先生の発案で「江戸時代漂着唐船資料集」というシリーズを刊行してきました。これは他に類を見ない史料集だと思いますし、関大のアジア文化交流研究センターやグローバルCOEでの研究の基礎となっています。

●戦前の研究者の国際性

実はこの資料集に興味を持つのは台湾や中国の研究者ばかりです。日本史の研究者には、いまでも鎖国的な見方がある。これはわたしが毎年のように中国へ行っているので余計そのように感じ



るのかもしれませんが。詳細な研究が進んでいる一方で、とにかく日本からしか見ないという感じで、同時に中国から日本を、韓国から日本を見たらどうかという視点が欠けているのではないのでしょうか。

その点、戦前に植民地の大学や研究機関で働いた経験がある研究者の方が、広い視野を持っていたかもしれません。確かに思想などの点で問題はあるかもしれませんが、着眼点や発想などはかえって面白い。

これは東洋史でも同じようなもので、わたしも若いころは「中国本土の研究をしないと東洋史ではない」とかいわれてきました。しかしもっとさかのぼってみると、たとえば内藤湖南・桑原隲藏^{くわんげいざう}などは広い視野で研究をしていた。わたしに近い分野でいうと、京都大学におられた矢野仁一^{やのじんいち}先生が『長崎市史』（通交貿易編・東洋諸国部）を執筆されています。その中の「支那の記録から見た長崎貿易」という論文などはとても参考になりました。矢野先生は東洋史の研究者ですが、当時の実力者は自分の専門分野以外でも立派な業績を残されています。

●台湾や中国などの研究状況

海の歴史については、中国や台湾のほうが熱心かもしれません。台湾では、十数年前から中央研究院に海洋文化を研究するセン

ターがおかれていて、二年おきにシンポジウムを開いて論文集なども刊行しています。

中国では、一九七四年に福建省の泉州というところで南宋末元初期の沈船が発見されて、一躍注目を集めるようになりました。福建省には泉州海外交通史博物館があつて、『海交史研究』という雑誌を一年に二回出しています。わたし自身は一九八六年から毎年夏に中国へ行つて学会などに参加し、たいして中国語もできないうちから研究発表もしてきました。今では海洋史の研究者とは、ほとんど顔見知りになりました。中国では一九八〇年代の改革開放経済の導入と経済発展をきっかけに、ローカルヒストリー的に地域の港に興味を持つて研究する人も増えてきました。

この七月には、中国政府の全面的な支援の下、上海市内から一時間ほどのところに中国航海博物館という巨大な施設が完成しました。わたしも開館の基調講演に招かれて行ってきたのですが、たいへんな盛り上がりでした。メインホールには明の時代の巨大な帆船が復元されています。これからはますます海の歴史が盛んになるのではないのでしょうか。

それに比べると、日本では全国的な規模での盛り上がりには欠けているように思います。私が漂着船の史料を集めていたころには、ほかの研究者は誰も興味を持っていませんでした。

日本でも郷土史の立場で研究されている方は古くからいました。たとえば地元で漂着した船について興味を持つといったケースです。でも「たまたまやってきたその船」にしか目がいきませんか

ら、それでは全体像をつかまえることはできない。やはり中国の船に関する情報を広く集め、全体の流れをつかまなければならぬのです。

最近になってようやく若い先生方が漂着船の問題や、漂流した人をどうやって連れ帰るかといった送還体制の問題などに興味を持つようになってきました。

さらに近年、寧波を中心とした海域交流に焦点を当てた共同研究（通称「寧波プロジェクト」…東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成）が文科省の科研費プロジェクトに採択されてからは、興味を持つ研究者が少し増えたかもしれません。

●文化交渉学の構築をめざして

現在取り組んでいるグローバルCOEプログラムでは、「文化交渉学」の構築を掲げています。従来は日本史・中国史・韓国史といったいわゆる一国史の枠組みのなかで成果が積み重ねられてきました。しかし、グローバル化が進むなかで、その枠組みではとらえきれない問題が出てきています。そこで、地域の枠組みだけでなく、歴史学とか言語学・哲学という枠も越えた総合的な見地からとらえられないか。という問題意識から出発した学問です。今回出版する『近世東アジア海域の文化交渉』も、そうした文化交渉学を構築するためのわたしなりの取り組みなのです。

（二〇一〇年八月一日 於・関西大学）

絵本作家・居初いそめつなの発見

本年八月末から一月初めにかけて、「奈良絵本・絵巻の宇宙」展を思文閣美術館で開催する。二〇〇四年八月から九月にかけて行われた「奈良絵本・絵巻の世界」展（思文閣美術館）の続編となる展覧会であるが、このわずか六年の間でも、さまざまなことが明らかになってきた。その一つは、奈良絵本・絵巻の制作者として、居初つなという女性が浮上したことである。

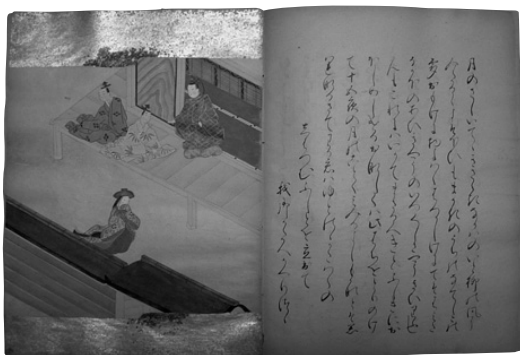
実は、以前、本誌（『鴨東通信』第六五号、二〇〇七年四月）においても、居初つなが関わっていた書物について「奈良絵本・絵巻の叢書」という題で述べている。要は、江戸時代前期から中期に制作された奈良絵本・絵巻には、本文も挿絵も同筆の作品群がまとまって残されており、その一つとして、『伊勢物語』や『鉢かづき』等六点の叢書を取り上げたのであった。その叢書の本文の筆跡は、他の叢書や、単独の奈良絵本・絵巻にも見られることから、絵草紙屋に雇われた書家（筆工、筆耕とも）のものであることが推測できていた。それらの奈良絵本・絵巻は、元禄年間前後の制作と推測はしていたが、宝永二年（一七〇五）に刊行された『西行物語』にもその筆跡が見られたから、江戸時代前期から

中期にかけての書家であろうこともわかった。しかし、それ以外の多くの筆者と同じように、その筆者の名前まではわかっていなかったのである。

ところが、二年前に実践女子大学の展示を見ていた時に、前出の叢書の奈良絵本『伊勢物語』とよく似た絵巻『伊勢物語』の存在に気付いたのである。その絵巻『伊勢物語』は、絵巻と奈良絵本との形の違いはあっても、本文の筆跡や挿絵の描き方が酷似していた。しかも、その絵巻には、「居初氏女書画之」という奥書が存在していたのである。同じような奥書を有した奈良絵本が他にも存在しているのは知っていたが、よくある偽の奥書であろうと思っていた。しかし、実践女子大学の展示の解説には、同じ奥書を有する奈良絵本『狭衣の草子』が存在することが記されており、自分も同じような奥書を記した写本の『伊勢物語』を持っていたことも思い出した。ただし、その写本は、奥書の一部を消した跡があり、「居初氏女」とは、きちんと読みきれていなかったのである。

そこで、それらの「居初氏女」と記された奈良絵本・絵巻や写

石川透



居初つな制作とみられる「鉢かづき」(奈良絵本)

本を検討すると、それらは全て同筆で、しかも、先に述べた叢書の奈良絵本・絵巻とも同筆であることがわかった。ここまでくると、「居初氏女」を調べざるをえなくなる。幸いに、「居初」という苗字は珍しいから、調べるのも簡単であった。もちろん、日本史事典などの事典類には出てこないが、『国書総目録』（岩波書店）の人名索引を見ると、三件載っていた。そのうち、元禄年間の出版物がある「居初つな」が怪しいと思い、その著述を調べてみた。

『国書総目録』は、明治時代より前の日本の書物の総目録であり、それがどこに実在しているかも記されている。それらは日本各地の機関に所蔵されていて、多くの作品は、簡単には見ることができないのであるが、幸いなことに、「居初つな」が記した往来物（模範文例集、書道の手本にもなる）は、影印版が多く出版されており、すぐに身近な図書館で調べることができた。

その往来物の筆跡は、大ぶりであるものの、明らかに「居初氏女」の奈良絵本・絵巻群と同筆であった。そして、その往来物の作例については、往来物研究者による研究もなされていたのである。

こうして、往来物作家であった居初つなが、奈良絵本・絵巻を大量に手がけていたことが明らかにしたのである。しかも、「書画之」と記されていることから、本文の部分だけではなく、挿絵も描いていたことがわかったのである。わかってから改めて一群の奈良絵本・絵巻を見ると、その挿絵に描かれた人物はとてかわいらしい顔をしていて、いかにも女性らしい絵なのである。

その後の調査で、居初つなは、『源氏物語』五四帖を写していたこともわかった。明らかに、たんなる趣味ではなく、職業として写しているのである。現在わかるところでは、日本初の女流職業絵本作家といつてよい存在である。居初つなが、どのようにして絵本作家となったのか、どのような人生を送ったのかについての多くは、現在不明であるが、奈良絵本・絵巻の視点からも、ジェンダーの問題からみても、とても面白い存在なのである。

（慶應義塾大学教授）

おそまきの夢——後鳥羽上皇論上梓——

谷 昇

私は、県立高校の教員（主に化学を教えていた）を長くつとめたのち、定年退職の翌日立命館大学史学科の一回生となった。六〇歳になってなお「日暮れて道遠し」ならぬ「道もなし」といった心境だったが、ピーカーやフラスコをいじりながら「余生」を過ごすわけにもいかず、さりとて晴れて耕すに田畠なく、雨に読むべき書物も持たなかったゆえの進路選択だった。以来十年、学部・修士・博士課程と順調に進み、卒業後のいまなお大学に通っている。先生方や学生のみなさんは私を大切に、分けへだてなく遇して下さり、とてもありがたい学生生活である。

「なぜ日本史？」「なぜ一回生から？」と、いろんな人からさんざん問われた。第一問については、自身に「理系の血」みたいなものが流れていること、語学不得手……といった諸条件から専攻を引き算した結果が日本史を選択させた。入学当初理系の血は考古学の方へ流れたが、真夏の発掘実習に参加して、「これは無理」と観念した。結果論だが、史料を駆使して実証を積み上げる文献史学の方法が自分に合っていた。第二問には、日本史を、一から、赤ちゃんのような気持ちで勉強したかったから、と答え

ておこう。学問の適齢ははるか後方に過ぎさってしまったっており、忘れ、汚れ、かつ貫ぬき難かった勉強への初心にかえることが何より大切なことに思われた。

文献史学は本がたよりである。さいきん、電子出版とやらで、紙の本は旗色がよくない。「iPad」も欲しいけど紙の本も良い。青年のころ、必要があつて「本をめくる」という珍妙な機械を設計・試作したことがあつた。書物を楽しみ書物から学び、生きる道を見いだしていった無数のひとびとの行為が、まず本のページを開くことから始まった。いわばわれわれの文化の大きな部分が、このささやかな行為に支えられている。本の紙質・厚み・指先の微妙な感触とザラつき、かすかな汗ばみと湿気……といったものの助けを借りてひとは本を繰り、時空間を自在に行き来することができる。繰りゆくページにカビの臭いでもあろうものなら、その本を遠ざけていた長い日々への悔恨や追憶が脳裏をよぎる。目は心の窓というが、手もまた心の窓である。

私の書物観は、こうした事情もあっていささか機能論的な傾向がある。同時に、本というものはもっぱら私の向こう側にあつて、

知識や記録を注ぎ込んでくれる源泉として存在した。ところが、今度思文閣出版から、二〇〇九年立命館大学に提出した博士論文をもとにして、『後鳥羽院政の展開と儀礼』という単著を上梓することになった。受け手から送り手へのはじめての、小さな変身である。「夢の実現」という、青臭く気恥ずかしいことばが、おそまきながら現実のものになりつつある。

テーマとする後鳥羽天皇は、源平内乱のさなかに生をうけ、寿永二年（一一八三）西海にあった安徳天皇在世のまま、神器を帶びずに踐祚した。以降、鎌倉幕府草創期の、源家三代將軍（頼朝・頼家・実朝）とほぼ並行して天皇・上皇の位にあって執政し、ついには執権北条義時に戦いをいどみ（承久の乱）、敗れて配流地隠岐に没した天皇としてつとに有名である。また、『新古今和歌集』を編纂したほか、芸能・武芸に長じたマルチにしてワンマンの帝王であった。しかし武家に引いたがゆえに、武士の時代には「愚帝」、明治王政復古とともに一転「聖帝」と評価されるなど、死後なお歴史に翻弄されなければならなかった。後鳥羽はまさに「論点」あふれる天皇である。

ところが、後白河法皇や源頼朝・同実朝らにくらべ、歴史学からする「後鳥羽論」の成書が極端に少ないのである（文学関係はいっぱいある）。現在、目崎徳衛氏の遺稿が編纂された『史伝後鳥羽院』（吉川弘文館、二〇〇一年）と鈴木彰・樋口州男編『後鳥羽院のすべて』（新人物往来社、二〇〇九年）の二著を数えるにすぎない。研究者諸氏が後鳥羽論執筆に慎重であられるのは、後鳥

羽研究の成熟と深化を待たれたことであろう。かく考えるとき、斯界に小著を投ずるのは、僭越無謀のそしりをまぬがれないであろうが、一初学生の冒険として御海容を願うほかない。

内容は、後鳥羽上皇研究史を整理したうえで（第一章）、後鳥羽天皇の史上初の神器不帶踐祚、壇ノ浦からの神器還京、宝剣なき朝儀と神器搜索、後白河・頼朝・慈円などの神器観について論じた（第二章）。また大嘗会和歌に詠み込まれた地名と「風土」・王権の關係について考えた（第三章）。宗教儀礼に関しては、承久年中に後鳥羽が修せしめた密教修法を「修法群」として整理し、それらが時々の政治課題に対応していると主張、聖教史料の政治史への利用を試み（第四章）、あわせて具体的な修法実修過程を明らかにした（補論）。さらに、承久の乱直前、後鳥羽上皇と、賀茂・石清水・熊野各社との間に、互恵・依存關係があった事実を指摘した（第五章）。巻末に詳細な「後鳥羽上皇関係年表（稿）」をつけた。

以上、本書は、儀礼が政治的有効性をもちえた時代としての中世理解にたち、後鳥羽朝政の出発点（踐祚）から終結（承久の乱）にいたる政治過程を見通したうえで政治史叙述をめざしたものである。（立命館大学客員研究員）

微笑みの国の日本研究

岩井茂樹 いわ い しげ き

タイは「微笑みの国」といわれる。たしかに、タイ人は元気で、彼らの「微笑み」はとても美しい。

私がタイに来たのは、二〇〇七年四月のことだった。空港を降りた途端、これまで体験したことのない暑さに、いつそこのまま日本へ帰ってしまおうかと思った。それがどうだろう。三年余りが過ぎた今では、タイの暑さが心地よくなってきた。この間にずいぶんと自分も変わったものだな、とつくづく思う。

直接のきっかけは、当時国際日本文化研究センターに研究員として在籍されていたチャワーリン・スベタナンさんの紹介だった。私は同センターで技術補佐員をしていたが、ちょうど任期が切れる時期と重なっていた。以前から海外で働きたいと思っていたことと、日本国内の就職難がタイの大学へ行った直接の理由だ。

けれども、正直、私などで大丈夫だろうか、と心の中では思っていた。というのも、私には教育経験がなく、海外生活も初めてだったからだ。それに加え、暑さが大の苦手で、健康面にも不安があった。だから空港に降り立ったときのあの異常な暑さは、私にはとても耐えられないと思ったのだ。

私が勤務しているチュラーロンコーン大学は、タイでもっとも「優秀」な学生が集まる大学だと言われている。この「優秀」という言葉が曲者だった。

たしかに、私が所属している日本語学科の学生は「優秀」で、日本語だけでなく、英語・中国語・韓国語・フランス語と数ヶ国語を自由に操る学生も少なくない。羨ましい限りである。彼らの言語習得能力は非常に高い。それが社会に出ても役に立つようなシステムになっている。実利と結びついているのだ。だからみな真剣そのものだ。

ところが、一つ大きな問題があった。彼らは確かに「優秀」だが、それは与えられたことに対して正確に応えられるという「優秀」さであった。つまり、これをしろといわれたことはきっちりとするし、必要以上のことをしてくる学生さえいる。だが、自分の考えを述べよとか、自分の考えで行動せよ、といわれると今まで「優秀」だった学生が何もできない学生に変貌する。

これは学生だけが悪いのではない。教育システムにも問題がある。自分で考えるような教育がなされていないのだ。大学に入っ

ても自由に考えさせてもらえない。極端な場合、先生に対し自分の意見を主張すると怒られたり、出来の悪い学生と判断され、その結果成績も下げられることさえある。だから、先生に怒られないように当たり障りのないことしかしない。自然と自分では考えないようになる。いや、むしろ余計なことは考えてはいけないのだ。こちらでいう「優秀」な学生とは先生の意見に逆らわない「いい子」という意味だった。

このことがわかるまでに、一年以上かかった。それ以降、授業で間違うことを強制した。無理に間違わせることで、まず「正解」からできるだけ遠ざけるようにした。その上で、より妥当性のある答えを自分で考え、選んでいくという方法を使った。こうした訓練を何度も繰り返し繰り返し行なった。それから二年余り、やっと自分の頭で考えられる学生が増えてきた。ユニークな研究をする学生も出てきた。これからが楽しみだ。

学生の問題はどうか克服できる目処が立った。あと五年もすれば、世界的に通用する日本研究がタイから発信できると思う。だが同時に、研究体制の構築も必要だ。タイの日本研究環境における最大の問題は、資料収集や調査が困難なことである。まず日本語の本は高価だ。よしや高価な本を購入したとしても、図書館に日本語の図書を登録・管理できる人がいない。さらに、図書館や大学間のネットワークが一切ない。だからタイにどんな資料があるのかまったくわからない。かといって、資料収集のために頻繁に日本に行くこともできない。この問題を何とか解決しないと

いけないと思う。だが、これは到底私一人で解決できる問題ではない。

だから私は今、日本のシステムを活用した日本研究法を模索している。タイにいても、いや世界中どこにいても、日本研究ができるように。幸いにも日本では様々なデータベース（DB）が作られ、それらがネット上で公開されている。ただ残念なことに、研究ツールとして有効活用されているかというと、そうとはいえない状態だ。研究の推進を目的に作られたはずのDBが、有効活用されずにいる。資料の入手さえ困難な外国の研究者がこれを使わない手はない。DBはその特性を理解すれば、あとはアイディア次第で十分新しい研究に結びつく。現在、いくつかのDBを活用した日本研究を発表しようとしているところである。近々その成果を発表できると思う。

タイから日本へ、いや世界へ、最先端の日本研究を発信すること、現在の私の夢である。それが出来たとき、私もタイの学生たちも、最高の「微笑み」をするはずだ。それを期待し、想像しながら、教育と研究に取り組んでいる次第である。将来のタイにおける日本研究は、きっと「暑い（熱い）」ものになるだろう。

（タイ・チュラーロンコーン大学講師）

史料探訪

(42)

みな かた くま ぐす 南方熊楠「履歴書」

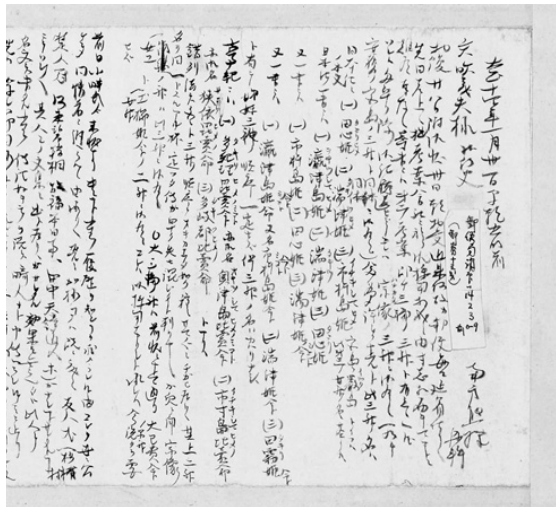
南方熊楠顕彰館 館長

なか せ ひさ はる
中瀬喜陽

南方熊楠に「履歴書」と言いならされている一巻の書状がある。一般に世間で通用する履歴書とは趣きを異にしたもので、それが

篤なる御親切とともに永く永く忘れる事の出来ないものである」と謝辞を述べているが、

世に出たのには仏文学者で作家の平野威馬雄^{マオ}の『博物学者南方熊楠の生涯』（昭和十九年七月刊）からである。この著書の資料として借り受けたのが本書簡で、その間の事情を平野は「前郵船社長矢吹義夫氏宛に翁が、大正十四年一月廿一日に書送った翁自称『履歴書』である。全文手紙の形式である。巻紙全長三間にあまる、毛筆で細字、何万といふ厩大なもの。けだし翁の書簡中最大のもの」と云へよう。（中略）この書状を絶対門外不出の、国宝的貴重文献として秘蔵して居られた小畔氏（名、四郎）が、破格にも、進んで筆者の使用に委ねて下さった事に對しては上松氏（名、菊）の終始して厚



世間を驚かし、「朝日新聞」（昭和十九年四月二十九日付）では「世界に誇る偉業、南方熊楠翁の秘稿、発見された「自筆履歴書」の全貌」という見出しで報道されている。これまで虚構に彩られていた南方伝を本人自身の筆をもって正すことができる待望の書簡だからである。

ではなぜこの貴重な書簡が名宛人である矢吹の手を離れて、小畔のもとにあつたのか。これには顕彰館に所蔵されている、まだ読まれていない熊楠から小畔に宛てた書簡を丁寧に読めば、さらにはつきりすることであるが、これは熊楠にとって一世一代の長編自叙伝である。も

う二度と書くことはない。ところが受取人の矢吹からは近々ロンドンへ赴任が決った旨手紙が届いた。ロンドンへいく矢吹には無用の長物となることは必至だとするとこの履歴書もどうなることかわかったものではない。そこで熊楠は小畔に二つのことを依頼した。一つは矢吹方にある履歴書を貰って保管してほしい、二つは「南方二書」のように印刷できないか。これに対し小畔は表現に過激なところがあるので補訂されてはどうかと進言した。最終的に小畔のところに保管されていたのにはそんな事情があつて文字通り秘稿となつたものである。

熊楠の手紙は豊富な話題を次から次へと展開して尽きること知らないエネルギーにみちあふれている。そのためたいていの書簡には第一信に対して追伸の二信が入ることになる。その典型が「南方二書」であり、「履歴書」である。第一信は次のような内容である。

大正十四年一月三十一日午前五時前、

矢吹義夫様御侍史



「履歴書」巻頭部分(南方熊楠顕彰館所蔵)

南方熊楠再拝

(中略)

前日小畔氏より来状あり、貴下小生の履歴を知らんことを求められ候由これを世に公けにして同情者に訴えらるる由承り候。しかるに、かようなことはすでにただただ友人ども(杉村楚人冠、河東碧梧桐、故福本日南、田中天鐘道人等) がなし下されたることにて、それぞれの人々の文書に出でおり候が、さしたる効果も無之、ただこの人々の名文で書きたる小生の伝記ごときものを読んで畸人など申し伝えられ候のみに止まり、まずは浮かれ節同様の聞き流しに有之候。(略) いずれも小生を通り一遍に観察せし人々の出たためにて、小生は決して左様不思議な人間に無之候。左に小生の履歴を申し上げ候。

右のような次第で履歴書の呼び名が生

まれたものと考えられる。

「履歴書」と希望したため前代未聞の破天荒な書簡に接し矢

吹は驚きかつ感激した。

熊楠から夢想だにしない、真摯な長文の書簡体履歴書を受取った矢吹は、早速次のようなハガキを熊楠に出している。

拝啓 七日付貴状難有拝読仕候。益々御勇健之段何よりと奉賀上候。先に御恵投相蒙り候老台御履歴書拝誦数次、不撓不屈の御涯を承知いたし感佩措く能はず、世間崎人など申候は以ての外と存候。貴書により感興奮起させるものは有之まじく、世間多くこれを知らざるは残念至極に存候。小生倫敦赴任につき色々御注意被下御芳情難有御礼申上候。彼地には色々御知合等も可有之御差支なき限り御紹介方よろしく願上候。尚御短冊是非御恵与被下度、必ず座右に備可申候。西航船室満員にて四月中出帆出来るや否や疑問に候

句を賜はりしに答へて

路のとう輝る日を受けて春霞

二月十日朝

早々敬具

ここで熊楠の大正十四年当時の日記から進行の過程を検証すると、

一月三十日 矢吹からの来信着

二月一日 矢吹への状認め始める

二月三日 矢吹宛書留状一発信（予の履歴書長文一）

二月十七日 予は矢吹氏らへ状かき徹晝不成

二月十九日 発信 矢吹義夫宛書留状一（履歴書その二）

二月二十日 流行感冒にて終日臥す

これを見ても明らかなように熊楠から矢吹へのいわゆる履歴書

は前後二通あり、第一通は、二月一日に書き始め二月三日に書き終わり投函、追って第二信は病床で少しづつ書き二月十七日全力をふりしぼって書いたが、ついに二月十九日流感に耐えきれず擱筆したことがわかる。履歴書は第一通は三昼夜不眠不休で、第二通も三日ほどかけた労作である。

二通の書簡はその後貼合わされ一巻仕立となった。全長約二十五尺（八・二五メートル）といわれる。

南方熊楠顕彰館

和歌山県田辺市中屋敷町36番地

Tel. 073912619909

午前10時～午後5時

ウェブサイト <http://www.minakata.org/>

Eメール minakata@city.tanabe.lg.jp

南方熊楠邸に遺された蔵書・資料を恒久的に保存し、熊楠に関する研究を推進し、その成果の活用を図り、また熊楠についての情報ステーションや学びの館として、南方熊楠邸の隣地に平成十八年開館。熊楠の業績などを紹介する展示や関連図書の閲覧、所蔵資料のデジタル画像やデータの検索閲覧、粘菌標本の顕微鏡観察等、熊楠がどのような研究をしたのか、どのような足跡を残したかについて気軽に理解を深めることができます。

また、一般公開されている南方熊楠邸では、熊楠の生活と研究の拠点であった場所、空間を実感していただけます。詳細は直接施設まで。

— MEMO —

書評・紹介一覧 6～8月掲載分		※(評)…書評 (紹)…紹介 (記)…記事〔敬称略〕
和紙文化	風俗絵画の文化学	
(紹)京都新聞 6/9(松岡正剛)	(評)日本歴史 第746号(岩本馨)	
原田伴彦著作集第三巻 茶道文化史	京都 芸能と民俗の文化史	
(紹)京都新聞 7/22(松岡正剛)	(紹)京都新聞 8/20(松岡正剛)	
青島の都市形成史：1897-1945	平安京とその時代	
(評)中国研究月報 7月号(李偉)	(紹)日本史研究 第576号(本庄総子)	
中世史科学叢論	中国語圏における厨川白村現象	
(紹)古代文化 第62巻1号(美川圭)	(紹)東方 第353号(後藤岩奈)	
日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚	応用美術思想導入の歴史	
(評)日本歴史 第765号(檜山幸夫)	(評)月刊美術 8月号	
九州の蘭学	太子信仰と天神信仰	
(紹)EuskadiAsiaのWebサイト http://www.euskadiasia.com/	(評)中外日報 7/15	
武野紹鷗 わびの創造	(紹)てんまてんじん 第58号	
(評)日本歴史 第746号(矢内一磨)	一休派の結衆と史的展開の研究	
松前景広『新羅之記録』の史料的研究	(記)京都新聞 8/4	
(紹)史学雑誌 第119編第7号(鶴田啓)	(紹)寺門興隆 8月号	
	(評)中外日報 8/31	

6月から8月にかけて刊行した図書

図 書 名	著 者 名	ISBN978-4-7842	定価	発行月
言語のあいだを読む	大澤吉博著	1524-9 C3090	9,450	6
一休派の結衆と史的展開の研究	矢内一磨著	1525-6 C3021	8,190	6
追憶の記	芝田藤子著	1519-5 C1071	2,100	7
般舟讃私講	大塚靈雲著	1530-0 C3015	3,675	7
俱舎論音義の研究	西崎 亨著	1509-6 C3081	9,450	8
小児科学の史的変遷	深瀬泰旦著	1526-3 C3047	9,450	8
房総風雅史 古代・中世編	小倉光夫著	1520-1 C1021	5,985	8
入門 奈良絵本・絵巻	石川 透著	1531-7 C1091	2,100	8

6月から8月にかけて刊行した継続図書

シ リーズ 名	配本回数	巻数	巻タイトル	ISBN978-4-7842	定価	発行月
尾陽	6	6		1522-5 C1370	3,150	6
新島襄を語る	7	7	ハンサムに生きる	1527-0 C1016	1,995	7
京都大学史料叢書	17	17	安祥寺資財帳	1516-4 C3021	5,775	7

(表示価格は税5%込)

おうとうつうしん

鴨東通信 四季報 No.79

2010(平成22)年9月10日発行

発 行 株式会社 思文閣出版

〒606-8203

京都市左京区田中関田町2-7

tel 075-751-1781

fax 075-752-0723

e-mail pub@shibunkaku.co.jp

http://www.shibunkaku.co.jp

表紙デザイン 鷲草デザイン事務所

■定期購読のご案内■

『鴨東通信』は年4回(3・6・9・12月)刊行しております。

代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛お申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

営業部より

☆フェア情報

ジュンク堂書店新宿店（東京都新宿区）

歴史書懇話会フェア

「戦国の争乱」豊臣氏滅亡」 10月中旬まで

ジュンク堂書店大阪本店（大阪府北区）

「平城京遷都一二〇〇年フェア」

（歴史書懇話会協賛） 10月末まで

インターネット通販サイトのセブンネットショッピングにおいて「戦後65年、近現代戦争史」フェア（歴史書懇話会協賛）を開催中。

http://www.7netshopping.jp/books/fair/fair_corner/-/fair_cd/sensou_2010

左記書店にて歴史書懇話会ミニフェアを開催中です。

- ・ TENDO八文字屋（山形県天童市）
- ・ 東北学院大学生協土樋店（宮城県仙台市）
- ・ 紀伊國屋書店新潟店（新潟県新潟市）
- ・ 今井書店グループセンター店（島根県松江市）
- ・ ブックデポ書楽（埼玉県さいたま市）
- ・ 芳林堂書店高田馬場店（東京都新宿区）

営業部より

☆学会出店情報

※出店学会・出店日は変更の可能性有

日本古文書学会（松山市にぎたつ会館）

9月25・26（土・日）

中古文学会（立命館大学）10月2・3（土・日）

日本史研究会（京都大学）10月9・10（土・日）

日本考古学協会（明石市生涯学習センター）

10月17（日）

日本思想史学会（岡山大学）

10月16・17（土・日）

仏教史学会大会（佛教大学）

10月23（土）

東洋史研究会（京都大学） 11月3（水・祝日）

日本医史学会関西支部総会

（京都市国際交流会館） 11月7（日）

全史料協大会（京都府立総合資料館）

11月24・25（水・木）

比較文明学会（池坊短期大学）

11月27・28（土・日）

☆和本をHPで販売いたします

9月中旬より、思文閣出版古書部のホームページで、写本・版本などの和本を販売いたします。毎月2回、追加・更新する予定です。ぜひご利用ください。

<http://www.shibunkaku.co.jp/kosho>

編集後記

▼超多忙な松浦先生。ゼミ旅行と海外出張の合間を縫っての収録でした。私はいえ、楽しいお話をいただき、ご著書を2冊も頂戴した上、お弁当までご馳走に……。少しは遠慮を覚えなければと大反省です。（M）

▼新しい企画の関係で焼畑（火入れ）に参加することに。準備万端だったのですが、直前の台風による延期で涙を飲みました。次回は必ず！焼畑本にも乞うご期待です。（須）

▼美術館とタイアップの図録『入門 奈良絵本・絵巻』の編集を担当。素朴でキツチュ（へたうま）な魅力にとりつかれることうけあい。アニメ好きも必見です。（大）

▼思文閣出版ホームページの個別書籍の紹介ページから、一部の大型書店の店頭在庫を調べることができました。小社在庫切れでも、書店にはあることも。お調べください。（h）

▼直会（なおりい）が祭りの宴をさす昨今。近所の氏神様ではカマス・大根・米を姿勢正して口にします。もうすぐ秋祭りです。（江）

▼猛暑のため、お湯を使わないのでガス代が驚くほどの安さ。ただ、クーラーのおかげで電気代は大幅に増ですが。（I）

▼表紙図版・媽祖揚（ボサアケ）図（弘化版「長崎土産」／近世東アジア海域の文化交渉）より

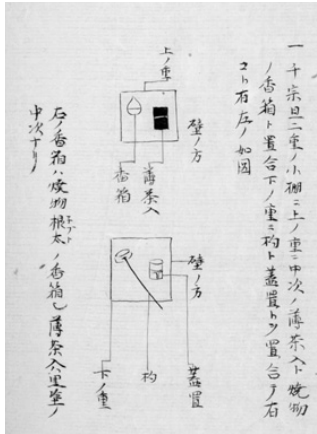
茶譜 全2冊

茶湯古典叢書5

谷晃・矢ヶ崎善太郎 校訂

【最新刊】

近世茶書としては最も大部にして体系的なものの一つである茶譜(全十八冊)は、利休・織部・遠州・宗和・宗旦のそれぞれの茶匠とその時代の茶の湯を、確かな情報に基づいて茶の湯の分野ごとに再編集したものである。西尾市岩瀬文庫蔵本を底本とし、現存する諸本と校合して全編活字化。挿図についても別冊の写真版で全て収録。



▼A5判／図版篇七五〇頁・本文篇一七〇頁

定価二二、〇〇〇円

たにあきら………野村美術館学芸部長
やがさぎぜんたろう………京都工芸繊維大学大学院工学研究科准教授

古田織部茶書 (全2冊) 茶湯古典叢書2・3

市野千鶴子校訂

利休の高弟・七哲の一人で織部流茶道の開祖、古田織部の茶道秘書を集成。

▼A5判・総八〇〇頁／揃定価一五、一二〇円

金森宗和茶書 茶湯古典叢書4

谷晃校訂

底本には金沢市立図書館蔵本文庫所蔵の『茶道の書本』を用いた。

▼A5判・四九〇頁／定価一三、一二五円

藤村庸軒年譜考 (全2冊)

白崎顕成著

庸軒の生涯の動向を、文献学的方法にもとづいて明かした異色の年譜考。

▼A5判・総一八四八頁／定価三六、七五〇円

茶道と恋の関係史

岩井茂樹著

「恋は茶道の精神に反する」――谷崎潤一郎の随筆にある興味深い一節をきっかけに、恋歌と茶道の関係を茶書や茶会記に探る。

▼A5判・二三二頁／定価三、九九〇円

近代茶道の歴史社会学

田中秀隆著

茶道が日本の「伝統文化」として認知されるようになった過程を考察する。

▼A5判・四五四頁／定価六、八二五円

◆入門◆ 奈良絵本・絵巻 石川透著



回 奈良絵本・絵巻とは…室町時代後期～江戸時代中期頃、手作りの彩色絵入りの絵本・絵巻で、今までその全容や成り立ちなど多くが不明確であった。

回 本書は飛躍的に進められた研究成果をふまえて、思文閣美術館（京都市）にて開催中の「奈良絵本・絵巻の宇宙展」図録。元禄年間に京都で活躍した女性絵師の存在を明らかにした作品も収載。御伽草子から王朝物語、軍記物語、歌集、日記、幸若舞曲、仮名草子など広範な奈良絵本・絵巻の世界を簡単な解説とカラー図版で紹介する入門ガイドブック。

いしかわ・とある…慶應義塾大学文学部教授。文学博士。

【最新刊】

内容構成(全一〇〇点)

I期・天正頃以前(黎明期) ～一五九五年頃	四点
II期・慶長頃(絢爛期) 一五九五～一六二五年頃	八点
III期・寛永頃(生産期) 一六二五～一六八五年頃	八点
IV期・寛文頃(最盛期) 一六五五～一六八五年頃	三六点
V期・元禄頃(終息期) 一六八五～一七一五年頃	三七点
VI期・享保頃以降(末裔期) 一七一五年頃～	七点

▼B5判・一二六頁／定価二、一〇〇円

祈りの文化 大津絵模様・絵馬模様

信多純一著

近江大津にて作られ、土産として全国で愛された民画・大津絵。その多彩な信仰、祈り、教訓、遊びの画題は、人々の想念の数々を端的に映し出す。その起源・絵馬との共通点・画題の意味などを考察・解説した全大津絵事典。



▼B5判・一七八頁／定価三、六七五円

風俗絵画の文化学 都市をうつすメディア

松本郁代・出光佐千子編

中近世における風俗絵画のメディア性に着目し、そこに描かれなかったものの持つ意味や享受者の視点、都の社会における聖と俗の姿、風俗絵画に表された芝居空間や行事のかたちらが年代とともにどのように姿を変えたのか、など様々な視点からアプローチする。

▼A5判・三六八頁／定価六、八二五円

百人一首万華鏡

白幡洋三郎編

日本人の生活全般にわたって深い関わりをもつ百人一首を、歌の解釈はもとより、歴史・選び方、カルタ、翻訳など、さまざまな角度から紹介し、その文明的広がりをさぐる。カラー口絵一六頁付き。

▼B5判・一七八頁／定価二、五二〇円

江戸時代の図書流通

佛教大学鷹陵文化叢書7

長友千代治著

江戸時代にみられた広汎な図書流通における、版元・本屋・貸本屋と読者を結ぶさまざまなルート、さらに実用書の出版や宣伝方法など、豊富な図版(一三〇点余)を通して平易に明かす。

▼四六判・三一〇頁／定価二、三二〇円

石山寺の信仰と歴史

鷲尾遍隆監修／綾村宏編

奈良時代、聖武天皇の勅願により創建され、古くから観音信仰の聖地であった石山寺。多くの人たちによってその信仰と文化が育み守られてきた名刹である。その信仰・歴史・美術・文学・經典を、第一線の研究者が、豊富なカラー図版とともに解説。オールカラー、図版150点。

▼A5判・一八〇頁／定価一、八九〇円

祭りのしつらい 町家とまち並み

岩間香・西岡陽子編／京極寛写真

全国の祭りを調査してきた編者が、豊富なカラー写真とともに、祭り飾りの歴史と現状、町屋の装い、祭りの伝統文化を活用したまちづくり、まち並み保存と祭り、大阪の造り物史などについて執筆。巻末に、探訪ガイドにもなる祭礼百選を付す。

▼B5判・二三四頁／定価二、三一〇円

増補 蓮月尼全集

村上素道編

幕末・明治の歌人大田垣蓮月は、多芸で知られるがとくに作陶と和歌に才能を発揮した。本書は、蓮月の歌・消息・伝記を取めた『蓮月尼全集』（昭和2年）に、新たに発見された資料を増補した昭和55年版の復刊。

▼A5判・七七〇頁／定価二一、六〇〇円

茶の湯文化と小林 一三

逸翁美術館編

逸翁美術館の新装オープンを記念して開催された特別展「茶人逸翁―茶の湯文化と小林 一三」（二〇〇九年）の展覧会図録。小林 一三（逸翁）の世界を5つのテーマ「茶道との出会い」「逸翁の茶懐石」「逸翁と茶友」「逸翁の茶道観」「逸翁の愛した茶道具」にそってオールカラーで紹介。

▼A4判・一四八頁／定価二一、〇〇〇円

東寺宝物の成立過程の研究

新見康子著

『東宝記』や東寺百合文書にみられる宝物目録などの史料をもとに、東寺に残る文化財の伝来過程を具体的に体系化した一書。本来の保管形態を復元し、伝来を確定して位置付けをしなす。カラー口絵4頁・本文挿入図版80点。

▼A5判・六三八頁／定価二一、六〇〇円

近世御用絵師の史的研究

幕藩制社会における絵師の身分と序列

武田庸二郎・江口恒明・鎌田純子編

官位官職制度の中に「御用絵師」はいかに組み込まれ、時の為政者は職能集団たる絵師の組織をいかに編成・掌握し、絵師たちはどのような身の処し方をしていたのかを考察。

▼A5判・四五八頁／定価七、八七五円

隔莫記 全7巻

（本編6巻）
（総索引1巻）

本編…赤松俊秀校訂／総索引…『隔莫記』研究会編

金閣鹿苑寺住持鳳林承章自筆の日記『隔莫記』を活字化。その記述は鳳林43歳の寛永12年（寛文8年）までの33年にわたる。近世文化播覧期の社会相を知る最重要史料。

▼A5判・総五一三〇頁／定価七三、五〇〇円
（総索引のみ）▼A5判・七六〇頁／定価一四、七〇〇円

応用美術思想導入の歴史

天貝義教著

ウィーン博参同より意匠条例制定まで
ウィーン万国博覧会への日本初参加から、意匠条例が制定されるまで、応用美術思想がいかに学習され、明治期の美術・工芸界において指導的役割を果たしたかを明らかにする。

▼A5判・四〇〇頁／定価七、八七五円

平成新修古筆資料集

全五冊

田中登（関西大学教授）編

完結

これまであまり顧みられることなく放置されてきた中世期書写の古筆切の収集・整理と体系化をめざし、編者蒐集の古筆切一〇〇余点について写真と詳細な解説によって紹介。

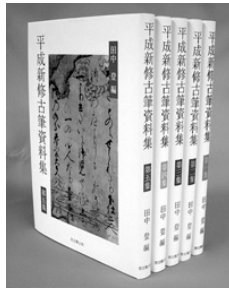
◆待望の第5集◆

【平成22年9月下旬刊行予定】

▶ A5判・250頁／定価2,625円

—既刊書のご案内—

第1集	定価2,730円	平成12年3月刊行
第2集	定価2,625円	平成15年2月刊行
第3集	定価2,625円	平成18年1月刊行
第4集	定価2,625円	平成20年9月刊行



小松茂美 人と学問

古筆学六十年

田中登編著

被爆体験の病床で『平家納経』と出会い学究に志し、東京国立博物館を経て古筆学研究を設立、ついには古筆学を大成した小松茂美博士の六〇年におよぶ学問のあゆみをたどる。

▼A5判・二五六頁／定価二、三一〇円

古今和歌集への道 国文学研究七十七年久曾神昇著

『古今和歌集成立論』を始めとして、古今集に関する数々の出版物で、研究史上不滅の金字塔を打ち立てた久曾神昇博士の回想録。国文学・古筆学・書道史に関心を持つ、すべての人々に送る恰好の一書。

▼四六判・二三六頁／定価一、九九五円

古筆切研究 [第一集]

小林強・高城弘一共著

著者及び村上列氏蒐集の古筆切の中から選りすぐりの五〇点を紹介。解題・翻刻のほか関連資料などについても言及して一点についてより詳細な解説を加える。

▼A5判・二八〇頁／定価二、九四〇円

近衛家熙写手鑑の研究 [仮名古筆篇]

村上翠亭・高城竹苞共著

陽明文庫蔵・近衛家熙写手鑑（予楽院臨書手鑑・重美）所収の仮名古筆（臨摸断簡）一〇〇点をとりあげ、全図を原寸大（一部縮小）で収録。一点ずつについて詳細な考証を加え、原本などの参考図版八五点も併載。

▼A4判・二八〇頁／定価二、六〇〇円

尾陽

徳川美術館編

従来『金鰯叢書』に収録されていた美術関係の部分に新収藏品紹介や修理報告などを収め、別本として年一回発行。

▼B5判・平均一〇五頁／既刊六冊／定価(各)三、一五〇円

くずし字辞典

波多野幸彦監修／東京手紙の会編

天皇・公家・武將・僧侶・茶人・文人・商人などの実用の書である自筆消息（書状）からその筆跡三五、〇〇〇字を拾集。採字した各文字にはその人名を明らかにした。くずし方の解説のみならず、文字をみてその筆順や筆法も鑑賞できる辞典。

▼A5判・一四五二頁／定価六、三〇〇円

三藐院 近衛信尹

残された手紙から

前田多美子著

本阿弥光悦・松花堂昭乗とともに「寛永の三筆」として日本書道史上にその名を謳われてきた近衛信尹。信尹の生涯を彼の残した手紙から読み解き、隠れた素顔を明らかにし、さらに能書としていかに遇されてきたのか、その書とはどのようなものであったのかを改めて考えなおす。

▼A5判・二七〇頁／定価二、四一五円

燕村

逸翁美術館・柿衛文庫編

南画・俳諧、さらに俳画の大成者として輝かしい足跡を残した与謝燕村の没後三二〇年を記念し、逸翁美術館と柿衛文庫が共同で編集。南画・俳画・嫁入手・扇面・草稿・短冊・俳書・書簡など、新出作品もふくめ全一七六点を解説を付してカラーで収録。

▼A4判・二一〇頁／定価二、三一〇円

革新の書人

河東碧梧桐

島田三光著

河東碧梧桐の書に魅せられ、碧梧桐に関するコレクションでは第一人者であり、書家としても活躍中である著者。その所蔵する豊富な作品群を通して碧梧桐の書の世界を紹介。正岡子規の高弟であり虚子と並んで双璧と謳われる碧梧桐の書を見直すとともにその業績を後世に伝える一書。

▼A4判・二一〇頁／定価五、二五〇円

橘為仲朝臣集

片桐洋一解説

定家手沢の伝西行筆歌集の完全複製。橘為仲は、藤原経衡・僧能因・素意・出羽弁・周防内侍などの歌人と交友関係があり、和歌六人党の一人とされた人物。勅撰集に合計九首収められている。本書は二本ある家集のうちの一。西行の筆蹟として尊重されてきた雄品である。

▼和装桐箱入／釈文・解題九八頁／定価五七、七五〇円

与謝燕村筆「奥の細道画卷」

鈴木進序文／岡田彰子解説

燕村が、敬愛する松尾芭蕉の『奥の細道』の全文を書写し、13点の挿画を添えた自筆画卷の完全複製（一卷）。京都国立博物館蔵本と逸翁美術館蔵本、および山形美術館蔵の屏風作品につづく貴重な重文級史料。独特な書風、酒脱な挿画は完成された俳画の趣きを備える。別冊解説付。

▼卷子仕立・桐箱入／定価一三六、五〇〇円

宸翰英華 別篇北朝（全2冊）

宸翰英華別篇編集会編

昭和一九年刊の『宸翰英華』には収録されなかった光厳天皇および光明・崇光・後光厳・後円融の北朝五代の天皇の主要な宸翰一〇一点を収録。

▼B4判・二四〇頁（解説A5判三八〇頁）／定価五〇、四〇〇円

近世禅林墨蹟（全3冊）

林雪光・鏡島元隆・加藤正俊編

近世および近代初頭の黄檗八〇・曹洞八六・臨濟二九二の計四五八名の禅僧の墨蹟を収録。墨蹟を通じ、各禅宗の宗風・歴史を知り得る好書。

▼A3判・各二〇〇頁／黄檗・曹洞編 定価三六、七五〇円

臨濟編一・二 定価各三三、六〇〇円

禿氏文庫本

龍谷大学善本叢書29

大取一馬責任編集

龍谷大学大宮図書館所管の「禿氏文庫」は、梵文経典や中国・日本の仏書をはじめ、真宗史・仏教美術に関する典籍、絵画等多岐にわたっており、総数二千三百余点に及ぶ。本書は平成二十年から龍谷大学仏教文化研究所の指定研究のもと、仏教・真宗・国史・国文の四班で行われた調査の結果、各班から善本に値するものを数点ずつ選び、影印(写真版)として一冊にまとめたものである。

【最新刊】

▼A5判・六七二頁／定価一四、七〇〇円

〔収録史料〕

興福寺奏達状

愚迷発心集

因明十題

佛母略問答抄

相承抄

親鸞聖人筆涅槃經文

執持鈔

蓮如上人筆正信偈

血脈抄

毎日講説草

本善寺実孝葬送次第

自讃歌

俱舎論音義の研究

西崎亨著

『俱舎論音義』は、『阿毘達磨俱舎論』三十巻と『俱舎光記』三十巻を巻第一より交互に配し、各々の書から難解な単字や熟字である漢字を抽出して、その音・訓について註釈を加えた巻音義。掲出字に付された和訓は語彙史料として有用であり、また、その和訓には多く声点が差され、鎌倉初期国語アクセント資料としても有益な史料である。現在伝わる主な写本について、影印(写真版)と模写で掲載。各伝本と引用書についての論考と各種索引を付す。

【最新刊】

▼A5判・四二四頁／定価九、四五〇円

西山浄土教の基盤と展開

五十嵐隆幸著

日本仏教を基盤に日本浄土教の祖師や、浄土宗の開祖法然の浄土教義、さらに門弟の證空や行観を中心に西山教義をまとめる。「旧仏教・新仏教」「正統仏教・異端仏教」といった対立構造ではなく、浄土教義を軸に日本文化を継承創造する仏道として、日本仏教の姿を構成する試み。

【最新刊】

▼A5判・三〇〇頁／定価四、二〇〇円

般舟讚私講

大塚靈雲著

善導の著書五部九巻のなかで『観經』の注釈『観經疏』を除いたなかで、とりわけ『観經』そのものについて関説している『般舟讚』。『観經』一經の經説の次第を踏んで讀みあげる『般舟讚』を、善慧房證空・西山上人の著書『般舟讚自筆鈔』等に依拠しながら、私訳私講を試みる。

【最新刊】

▼A5判・五三八頁／定価三、六七五円

法然伝と浄土宗史の研究

思文閣
史学叢書

中井真孝著

都市的な顔と田舎的な体を具有する浄土宗の性格が形成された過程を「法然上人伝」「中世浄土宗寺院」「近世本末関係」を軸に解明する待望の論集。

▼A5判・四三〇頁／定価九、二四〇円

仏教思想と浄土教

水谷幸正著

学・行・信の課題に応えて研鑽を積まれた著者永年の業績を集成。

【内容】

仏教思想研究／如来藏思想と浄土教研究／浄土教思想研究／導空二祖の浄土教研究

▼A5判・七二八頁／定価二二、六〇〇円

太子信仰と

天神信仰

武田佐知子編

信仰と表現の位相

時代を超えて、上下を通じた諸階層の篤い崇敬を得てきた、聖徳太子信仰・天神信仰の比較研究。各専門分野の研究者による、両信仰に関わる美術史的、文学史的、宗教史、芸能史的研究を集成し、時代のニーズとともに変化する信仰の形態や、それに付随するイメージの付与、そして宗派や地域を越えて多面的に利用されるそれぞれの信仰の進化形について明かす。



▼A5判・三四四頁／定価六、八二五円

総論（武田佐知子）

第一部 室町時代の紀行文に見る天神信仰・太子信仰／鶴崎裕雄／太子信仰と天神信仰（高島幸次）／江戸時代の天神信仰・太子信仰と城下町金沢の文化（濱岡伸也）

第二部 聖徳太子伝の史料性格（下鶴隆）／拡散する聖徳太子伝承（松本真輔）／唐本御影の伝来過程をめぐって（伊藤純）／地誌としての寛文刊本『聖徳太子伝記』（榊原小葉子）

第三部 菅原道真の仏教的言説とその継承（稲城正巳）／北野聖廟和歌・連歌とその功德（脇田晴子）／正面向きで直立する異色の束帯天神画像について（松浦清）／菅生天満宮所蔵・掛幅形式の天神縁起絵について（鈴木幸人）／越前国敦賀郡の天神信仰・序説（竹居明男）

一休派の結衆と史的展開の研究

矢内一磨著

一休没後も存続した一休派の結衆とその史的展開を解明。

【内容】

第一部 評議と祖師忌法会にみる一休派の結衆とその史的展開

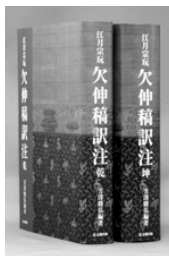
一休派における評議体制の成立と展開／祖師十三回忌、三十三回忌大法会と一休派の結衆形態／祖師百回忌大法会と一休派の結衆形態／近世の祖師忌大法会と一休派の結衆形態／近世における酬恩庵慈楊塔の祖師忌法会と一休派の結衆形態／五山禅林の詩会と禅僧の結衆

第二部 一休派における僧俗の結衆とその史的展開
文明年間の大徳寺復興と一休派／在俗信仰者の教団結衆／尼・女性信者の結衆／泉南仏国論／文明年間の大徳寺と堺町衆に関する新史料について

▼A5判・三七二頁／定価八、一九〇円

江月宗玩 欠伸稿訳注（乾坤・全2冊）

芳澤勝弘編著



江月宗玩の語録『欠伸稿』の龍光院蔵自筆本を翻刻。詳細な註釈と現代語訳を施す。分量的には、写本「孤蓬庵本」のほぼ半分だが、「孤蓬庵本」にはない偈頌等を収録。多くの文化人との交流をも記録している貴重資料。

▼A5判・総一四一四頁／揃定価一九、九五〇円

悟溪宗頓 虎穴録訳注

芳澤勝弘編著

妙心寺派四派の一つ東海派の祖であり、瑞龍寺開山である、悟溪宗頓（一四一六―一五〇〇）の語録『虎穴録』を翻刻。詳細な註釈と現代語訳を施した。

▼A5判・八四四頁／定価一〇、五〇〇円

近世東アジア海域の文化交流

松浦章著

【10月刊行予定】

古来、東アジア海域を舞台にした人や物の交流で活躍したのは、中国帆船であり、その状況は汽船の登場まで変わらなかった。本書はおもに清代帆船の活動に注目して、日本・中国・朝鮮・琉球をはじめとした東アジア諸国の交流の諸相を明らかにする。

【内容】

第一編 日中の文化交流

第一章 清「展海令」施行と長崎唐館設置の関係

第二章 来船清人と日中文化交流

第三章 近代日中の架橋

第四章 輪船商招局汽船の日本航行

第二編 海域を越えた文化交流

第一章 朝鮮使節が北京で邂逅した琉球使節

第二章 清代帆船で波濤を越えた人々

第三章 海域を越えた船神たち

第四章 清代沿海帆船に搭乗した日本漂流民

第三編 言語接触に見る文化交流

第一章 袁枚『随園詩話』と市川寛斎『随園詩鈔』

第二章 一九世紀初期に朝鮮・中国へ漂着した難民との言語接触

第三章 清代前期の広東・澳門における買辦

第四章 清朝中国人とイギリス人との言語接触

第四編 物流による文化交流

第一章 清代帆船が持ち帰った日本書籍

第二章 明清時代中国の海上貿易と陶磁器の流通

第三章 清国産豚の日本統治台湾への搬出について

第四章 日本植民地時代における台湾産包種茶の海外販路

▼A5判・四六〇頁／定価九、四五〇円

まつづら・あきら：一九四七年生。関西大学文学部教授。

大阪経済大学日本経済史研究所研究叢書

東アジア経済史研究 第1集

中国・韓国・日本・琉球の交流

大阪経済大学日本経済史研究所編

▼A5判・三四四頁／定価四、二〇〇円

近世長崎・対外関係史料

太田勝也編

近世の長崎町方や対外関係に関する史料4点を活字化。詳細な注と解題を付す。

▼A5判・七二四頁／定価二六、八〇〇円

漂流記録と漂流体験

倉地克直著

一八三〇年、二か月あまり太平洋上を漂流したのちワイリビンの無人島に漂着した岡山の神力丸の漂流記録を検討。史料篇では神力丸漂流事件の典型的記録を翻刻。

▼A5判・三二二頁／定価七、八七五円

朝鮮通信使の研究

李元植著

朝鮮通信使が訪日して果たした重要な役割を、政治外交と文化交流の両側面から捉える。

▼A5判・七三六頁／定価一五、七五〇円

戦国大名の外交と都市・流通

鹿毛敏夫著

豊後大友氏と東アジア世界

▼A5判・三〇〇頁／定価五、七七五円

思文閣史学叢書

伝統産業の成立と発展

桑田優著

播州三木金物の事例

兵庫県三木市の伝統産業、三木金物は近世後期に勃興し、現在にいたっている。本書は、三木金物が特産品として全国市場へ進出してゆく過程を、流通機構の発達など社会的な背景にも着目しつつ跡付ける通史。

◇内容◇

発刊に寄せて（冷泉為人）

第一部 三木金物の成立と発展

- 1 近世後期における在郷町の変貌
- 2 近世三木町における前挽鋸鍛冶仲間の成立と発達
- 3 近世後期における三木金物と大坂・江戸市場
- 4 金物仲買問屋と鍛冶職人
- 5 第二次世界大戦前における伝統産業の発展と同業組合
- 6 第二次世界大戦後における伝統産業の発展と同業組合

第二部 地場産業勃興と社会文化の発達

- 1 上州館林藩越智松平氏と飛び地領支配
- 2 播州三木町の切手会所
- 3 近世における加古川の舟運
- 4 三木町金物仲買問屋の経営
- 終章 江戸時代における情報の発達と文化交流

くわたく・まさる：一九四五年神戸市生。関西学院大学大学院文学研究科博士課程単位取得。神戸国際大学名誉教授。

【最新刊】

▼A5判・三〇〇頁／定価六、八二五円

三木金物問屋史料

永島福太郎編

三木金物仲買問屋「作清」黒田清右衛門家の近世史料を主体に、仲買問屋「道善」井上善七家、三木市宝蔵文書・市立図書館所蔵文書から金物関係史料を収録。解説と研究5篇を付した。

▼A5判・七〇〇頁／定価一〇、五〇〇円

武士と騎士

日欧比較中近世史の研究

小島道裕編

人間文化研究機構連携研究「武士関係資料の総合化」の一環として、日仏で行われた国際シンポジウムの成果。多様な視点から武士と騎士をとりあげた論考19本を収録。

▼A5判・五二二頁／定価九、四五〇円

近世長崎司法制度の研究

安高啓明著

長崎奉行の司法的権限を明らかにするとともに、近世都市長崎の司法体制を解明。

▼A5判・五〇四頁／定価五、九八五円

徳川將軍家領知宛行制の研究

藤井讓治著

領知朱印状に注目し、徳川將軍家の領知宛行制の形成過程とその特質を明らかにする。

▼A5判・四一二頁／定価七、八七五円

松前景広『新羅之記録』の

新藤透著

史料的研究

中世から近世初期の北方史研究における最重要史料『新羅之記録』の史料的价值を明らかにする。

▼A5判・五一八頁／定価二二、六〇〇円

京都芸能と民俗の文化史

山路興造著

芸能史研究の第一人者が、祇園御霊会や大念仏狂言、六齋念仏、賀茂社の御戸代神事、盆踊りなど京都の芸能民俗史の歴史実態を、資料のなかで検討しなす。

▼A5判・三六八頁／定価七、八七五円

小児科学の史的変遷

深瀬泰旦著

昭和36（一九六二）年より小児科開業医として永く地域医療に携わって来た著者が、内外の医学書原著をひもとき、小児科学の誕生や発展の跡をたどる。小児科医が減少の一途をたどり、高齢化が進む現今、著者が「小児科医の使命として、小児科学史への注目を喚起した」一冊。

▼A5判・六〇四頁／定価九、四五〇円

I 感染症の変遷

コプリック班の原著をたずねて／ヘンリー・コプリックが百日咳患者から分離した桿菌／麻疹予防接種の先駆者 Francis Home／仮性小児コレラ／明治12年沖縄県のコレラ流行と土屋寛信／疫病／消えた感染症／ジェンナーの「牛痘の原因および作用に関する研究」をよむ／わが国における熱性けいれんの歴史

II 歴史的な小児科書をよむ

ニルス・ローゼン・フォン・ローゼンシュタイン著『小児科学の知識と治療の指針』／マイケル・アンダーウッド著『小児疾病論』／カール・ヴンデルリッヒ著『疾病における固有の体温の様相』／ハーヴェイの血液循環論とその受容

III 疾病概念の変遷

先天代謝異常症の概念の歴史／Archibald Garrodのパラダイム／背番号病／文学作品に由来する2、3の病名／発疹性感染症にみる病名の由来／新生児黄疸と体質性黄疸

IV 小児病の診断と治療

シャーロック・ホームズのモデルジョゼフ・ペル教授と診断学の周辺／視尿病から科学的検尿法まで／輸液療法のあゆみ

V 小児科学の誕生と小児病院

小児科学の誕生と小児病院の歴史／人工栄養法の確立をめざして／ヒトの成長についての研究史／東と西の育児論

ふかせ・やすあき…1929年生。東京慈恵会医科大学を経て深瀬小児科医院を開業（～2008年）。2008年日本医史学会理事。2003年日本医史学会矢数（やかず）医史学賞、2004年日本医師会最高優功賞（医史学）を受賞。

天然痘根絶史

深瀬泰旦著

ジェンナーによって発明された牛痘接種法は、日本においてはお玉ヶ池種痘所において実践され、この技術を強力な尖兵としてお玉ヶ池種痘所は蘭学という学問を普及させる上での確固たる拠点となった。それは、日本近代医学の誕生、今日の医学・医療の興隆の礎ともいえる。天然痘の根絶を目ざす人びとに焦点をあてながら、この近代医学勃興期とも呼べる時代を活写する。

▼A5判・四五〇頁／定価八、九二五円

緒方洪庵 幕末の医と教え

中田雅博（産経新聞文化部記者）著

幕末の医学界に大きな足跡を残した緒方洪庵が、二〇一〇年に生誕二〇〇年を迎える。開国とグローバルイゼーションの激動の時代に「医は仁術」をすすんで実践し、適塾で弟子の教育に身を捧げた洪庵の軌跡を平易かつ詳細な文章でたどる好著。

▼A5判・四〇〇頁／定価二、六二五円



江戸期文化人の死因

杉浦守邦著

日本の歴史に名を残した人々が、どのような病気にかかり、どのように対処しながら一生を終えたのか。日記、書簡、肖像画など、さまざまな資料から二二名の死因を読み解き、「死因」という観点から、江戸期に活躍した文化人たちの生活を浮き彫りにする意欲作。

▼A5判・三四〇頁／定価二、六二五円

茶の医薬史 中国と日本

岩間眞知子著

本書は、中国と日本の医薬書史料の影印を多数収録し、それらの史料から中国・日本の各時代における茶の様相とその歴史的変遷を明かす。



▼A5判・五二六頁／定価九、四五〇円

増補・改訂 **西村茂樹全集** 日本弘道会編

本全集では、西村の学問的な業績を中心に構成し、これまで未発表の論説や『日本道德論』の初版本など思想的にも貴重な著書が初めて公刊される。

第9巻 訳述書5

▼A5判・七九四頁／定価一八、九〇〇円

『10月刊行予定』

既刊第1〜7・10巻 ▼A5判・平均九〇〇頁／揃定価一四八、〇五〇円

西村茂樹研究 明治啓蒙思想と国民道德論

真辺将之著

明治の啓蒙思想家・道德運動家である西村茂樹の思想について、従来の「保守」と「進歩」という二項対立的な枠組みから脱却し、時代状況に応じた問題意識の変遷と主張の展開を、史料に基づいて跡づけることにより明らかにする。

▼A5判・四八八頁／定価八、一九〇円

知の伝達メディアの歴史研究

辻本雅史編

教育史像の再構築

「教育」を「知の伝達」ととらえ直し、その伝達のための媒体を「メディア」と規定することで、学校を中心とした教育史像ではなく、学校を含みながらも、学校を越えたところまでなされる人間形成の営みを、捉え直す視点を提示。

▼A5判・三〇〇頁／定価五、九八五円

きたがきくにみち **北垣国道日記「塵海」**

塵海研究会編

京都府知事・北海道庁長官などを歴任した北垣国道は様々な活動や多くの人々との交流を、自ら「塵海」と名付けた日記に書き残した。本書は15年間の塵海研究会の翻刻成果をまとめたものであり、明治期地方官の実情を記した第一級資料である。

▼A5判・六四〇頁／定価一〇、二九〇円

明治期における不敬事件の研究

小股憲明著

これまで体系的な研究がされてこなかった不敬事件を、明治期について網羅。天皇制と教育の関係、天皇制と近代日本および国民の関係を考察する大著。資料編として「二二八事例」と三参考事例の概要および参考文献を収載。

▼B5判・五七六頁／定価一三、六五〇円

あり **森有礼における国民的主体の創出**

長谷川精一著

初代文部大臣としても知られた森有礼の言説やその政策の目的が、日本国民の主体の創出にあったという視点から、先行研究の大半が十分に検討してこなかった外国語の史料や文献をも利用し、さまざまな角度から検討を加えた画期的な一書。

▼A5判・四六六頁／定価九、四五〇円

韓国「併合」前後の教育政策と日本

本間千景著

佛教大学研究叢書8

第二次日韓協約から第一次朝鮮教育令発布後の期間を対象とし、当該期の修身教科書への影響や教員の養成・日本入教員の配置など、現地における学校教育をとりあつかう。

▼A5判・三〇〇頁／定価五、八八〇円

象徴天皇制の形成と定着

富永望著

「象徴天皇（制）」という言葉に着目して、この用語の使用法を検証し、さらに吉田茂の憲法運用と、それに異を唱える政治勢力や憲法学者の天皇観を明らかにする。象徴天皇制は新憲法の運用の積み重ねによって形成されたことを実証する気鋭の書。

▼A5判・三一六頁／定価五、〇四〇円

後鳥羽院政の展開と儀礼

谷昇著

〔九月刊行予定〕

後鳥羽天皇(上皇)が課せられた政治課題とそれに対する対応。政策理念が、宮中の儀式・行事である公事と修法・寺社参詣参籠など宗教儀礼の中に具現しているとする視点から、それらが果たした政治的役割を個別具体的に検証することにより、多面的な視点に立った後鳥羽理解、政治史叙述を企図したものである。

◆内容◆

- 第一章 後鳥羽上皇研究の進展と課題
- 第二章 後鳥羽天皇在位から院政期における神器政策と神器観
- 第三章 大嘗会和歌・地名に見る王権と在地
- 第四章 承久の乱に至る後鳥羽上皇の政治課題
- 〈補論〉
- 第五章 承久の乱における後鳥羽上皇の修法実修過程
- 後鳥羽上皇関係系図／後鳥羽上皇関係年表稿

▼A5判・三三〇頁／定価六、三〇〇円

たに・のぼる：一九三九年大阪府生まれ。一九六〇～二〇〇〇年、滋賀県立高校教員をつとめ、定年退職後、二〇〇〇年四月立命館大学文学部日本史学専攻に入学。同大学院を経て、二〇〇九年三月博士(後期課程)を修了。博士(文学)。現在、立命館大学客員研究員。

兵範記人名索引

兵範記輪読会編

一九八〇(昭和五五)年の輪読会発足より蓄積された研究成果を人名索引として集成。(増補)史料大成本を底本とし、男子の部と女子の部の二部構成よりなり、人名項目のほとんどもとに掲出年月日と原文表記を掲げ、原本の情報を盛り込んだ。古代・中世史研究者必携の一書。

▼A5判・四八四頁／定価九、四五〇円



『狭衣物語』享受史論究

川崎佐知子著

『源氏物語』に並称された平安朝後期物語の傑作『狭衣物語』受容の様相を文献学的見地から徹底的に分析検証し、連歌師紹巴が天正一八年に著した『狭衣下紐』を享受史の中核に位置づけた。物語文学研究の新スタンダード。

▼A5判・六四〇頁／定価二二、六〇〇円

中世前期女性院宮の研究

山田彩起子著

院政・鎌倉期における女性院宮(女院・后)の多様な存在形態を様々な視点から分析。中世前期の女性院宮研究のみならず、中世の公家社会研究に寄与する一書。

▼A5判・三一〇頁／定価五、八八〇円

中世史料学叢論

藤本孝一著

平安博物館・京都文化博物館を経て文化庁主任文化財調査官を務め、永年史料学の現場で調査・研究に携わってきた著者が、四〇年の研究成果をまとめた一書。豊かな学識と経験に裏打ちされた学問世界。

▼A5判・四四四頁／定価九、四五〇円

禁裏本歌書の蔵書史的研究

酒井茂幸著

禁裏本の総体を蔵書群として捉え、同時代の公家日記や古歌書目録類を援用しつつその伝来の歴史を跡付ける。また禁裏における歌学や古典文学の注釈・講釈に注目し、古典学の変遷を叙述。中世後期以降、歴代天皇がどのような歌書を求め、書写し、収蔵していったかを明らかにする。

▼A5判・三四四頁／定価五、八八〇円

京都の都市共同体と

権力 思文閣史学叢書

仁木宏著

中世京都の都市構造モデルを前提に、その変容のなから町の成立を読み解く。自力救済社会における武家と都市民の対峙が、やがて公儀を創出し、都市共同体を確立させることを明らかにする。中近世移行期における自治、共同体、権力の葛藤を正面から見すえ、都市の本質を具体的、理論的に分析した一書。

▼A5判・三三三頁／

定価六、六一五円

東寺百合文書

京都府立総合資料館編

第8巻二函三、木函、へ函、ト函一

【10月刊行予定】

東寺百合文書とは、東寺に襲蔵されてきた、奈良時代から江戸時代初期まで約九百年にわたる、総数一万八千点、二万七千通におよぶ日本最大の古文書群である（平成九年国宝に指定）。本史料集には「ひらかな之部」刊行中の『大日本古文書』未収録の「カタカナ之部」を翻刻。待望の最新刊。

▼A5判・各四五〇頁／定価（各）九、九七五円

序論 中世都市研究と京都

第1部 室町・戦国時代の都市

社会

中世後期の都市構造

自力救済社会と都市の「平和」
人的ネットワークの展開

第2部 都市共同体と公儀

都市共同体の確立と展開

都市共同体の発展と室町幕府

三好・織田政権の都市支配論

豊臣政権の「政道」と都市共同体

惣町・町組の形成過程

をめぐって

第3部 「首都」としての京都

都市構造の変容

都市の惣構と「御土居」

結論 京都研究と中近世移行論

中世京都の空間構造と

礼節体系

桃崎有一郎著

貴人と牛車ですれ違う場合の正しい作法は？参内するときはどこで牛車を降りればよいのか？

中世の京都で実践された礼節体系の考察を通じて、中世京都の空間構造を明らかにし、室町殿権力の形成・展開過程をも論ずる。



内容

第1章 中世公家社会における路頭礼秩序

——成立・沿革・所作——

第2章 中世武家社会の路頭礼・乗物と公武の身分秩序

第3章 中世洛中における街路通行者と第宅居住者の礼節的関係

——門前・第宅四面と広義の路頭礼——

第4章 中世里内裏の空間構造と「陣」

——「陣」の多義性と「陣中」の範囲——

第5章 中世里内裏陣中の構造と空間的性質

——公家社会の意識と「宮中」の治安——

第6章 中世における朝儀出仕と里内裏周辺空間秩序

——陣中・陣家・外直廬と乗車忌避——

第7章 陣家出仕の盛行と南北朝・室町朝儀体系の略儀化

——公家社会の経済的窮乏と室町殿義満の朝廷支配——

第8章 「裏築地」に見る室町期公家社会の身分秩序

——治天・室町殿と名家の消長——

第9章 中世後期身分秩序における天皇と上皇・室町殿

——身分尺度としての陣中・洛中の分析から——

第10章 裏築地の起源・沿革・終焉と中世の里内裏

捕論 内裏・院御所・京都論の動向と陣中・裏築地論の論点

▼A5判・五八四頁／定価七、五六〇円

ももさきゆういちろう：一九七八年東京都生、慶應義塾大学大学院文学研究科後期博士課程修了。立命館大学文学部京都学プログラム講師。博士（史学）。

歴史のなかで陵墓をみていくと、

そこには現在では思いもよらない姿があった――

高木博志 (京都大学准教授)
山田邦和 (同志社女子大学教授) 編
【9月刊行予定】

歴史のなかの

天皇陵

▼A5判・三〇〇頁／定価二、六二五円

天皇・皇族の墓である陵墓は、現在宮内庁の管理下にあり、一般の立ち入りが厳しく禁じられている。そのため、文化財としての陵墓の調査・研究は進んでいなかったが、近年になって、学界の要請をうけて神功皇后陵（五社神古墳）が研究者に限定公開され、仁徳天皇陵（大山古墳）が世界遺産暫定リストに登録されるなど、社会的にも大きな関心を集めている。

各時代に陵墓がどうあり、社会の中でどのように変遷してきたのか、考古・古代・中世・近世・近代における陵墓の歴史をやさしく説く。京都アスニーで行われた公開講演に加え、研究者・ジャーナリストによるコラムや、執筆者による座談会を収録。

【目次】

総論 古代・中世の陵墓問題	山田邦和
総論 近世・近代の陵墓問題	高木博志
天皇陵と古墳研究	菱田哲郎
奈良平安時代における天皇陵古墳	北 康宏
律令国家の陵墓認識	
平安時代の天皇陵	山田邦和
江戸時代の実天皇陵	上田長生
幕末期の陵墓修復と地域社会	高木博志
天皇陵の近代	

●コラム●



『文久山陵図』
神武天皇畝傍山東北陵

「天皇陵」における前方後円墳の終焉（高橋照彦）
平安京・京都近郊の陵墓と古墳（山本雅和）
藤原氏の陵墓——葬法と寺院と——（堀 裕）
仏塔に埋葬された上皇（上島 享）
天皇の怨霊とその祭祀（山田雄司）
中世の天皇の死（河内将芳）
綏靖天皇陵前東側所在の石燈籠について（福尾正彦）
江戸時代の大仙陵（伝仁徳天皇陵）と周辺住民（鍛冶宏介）
小中村清矩文書・門脇重綾文書の皇霊祭祀関係資料（武田秀章）
近代古墳保存行政と陵墓（尾谷雅比古）
宮内庁による陵墓管理の根拠（外池 昇）
終戦直後の天皇陵問題（入 里）
——発掘是非の議論と日本考古学協会による立ち入り——（桜井絢子）
世界遺産と君主制・王領（百舌鳥・古市古墳群、世界遺産暫定リスト記載決定・今井邦彦）

◎座談会◎

歴史のなかの天皇陵

上田長生・北康宏・高木博志・菱田哲郎・山田邦和（50音順）



後月輪陵 泉涌寺内

御堂関白記全註釈

山中裕編

〔第2期・全8冊〕

待望の
完結

本全註釈は永年にわたる講読会（東京・京都）と夏期の集中講座による成果を集成。原文・読み下しと詳細な註により構成。



第1回配本	長和4年	定価六、三〇〇円
第2回配本	寛弘3年	定価五、七七五円
第3回配本	寛弘7年	定価五、七七五円
第4回配本	寛弘4年	定価五、七七五円
第5回配本	寛弘8年	定価六、八二五円
第6回配本	寛弘5年	定価五、二五〇円
第7回配本	長和5年	定価一、〇七五円

【最終回配本】

御堂御記抄

長徳4年～長保2年

▼A5判・二〇四頁／定価五、二五〇円

平安京とその時代

臈谷壽・山中章編

平安朝の研究を牽引してきた臈谷壽先生を中心に、京都に所縁のある研究者が、「平安京」をテーマに、歴史学・考古学・地理学それぞれの視点から意欲的なアプローチを展開した、総合論集。



▼A5判・四八八頁／定価九、四五〇円

安祥寺資財帳

京都大学史料叢書17

京都大学文学部日本史研究室編

中町美香子・鎌田元一編集・解説

※安祥寺は、入唐僧・恵運（七九八～八六九）が開山した真言系の密教寺院。平安時代には山上伽藍（上寺）と山下伽藍（下寺）とから成り、多くの仏画・仏具・經典に加えて広大な寺領をも保有していた大寺院であった。

※本資財帳は、開基僧恵運が貞観9年（八六七）に自ら勘録したもので、寺の建立の経緯、貞観9年段階での寺の規模、資財などが詳細に記されている。巻首から巻尾まで備わった貴重な9世紀の資財帳史料の一つ。

※現存の諸本の祖にあたる京都大学蔵本（旧観智院蔵本）を影印（写真版）で収録。釈文と解説を付す。

▼A5判・一七六頁／定価五、七七五円

蓬萊山と扶桑樹

日本文化の古層の探究

岡本健一著

中国伝来の神仙思想が日本古代文化に与えた影響を、歴史考古学的に解明。

▼A5判・四四二頁／定価五、七七五円

東アジアのなかの日本

上田正昭著

折口民俗学を継承する著者の昨今の論文や講演録などを選んで収録。

▼四六判・三七六頁／定価二、五二〇円

大地へのまなざし

歴史地理学の散歩道

金田章裕著

古代日本条里制から世界地図まで、グローバルに展開してきた著者の諸論稿。

▼A5判・三二二頁／定価四、七二五円

元奈良博ボランティアによるスケッチ&エッセイ

奈良 千三百年ものがたり

すずきたみこ著・奈良国立博物館監修

奈良国立博物館の登録番号No.1ボランティアであった著者が、14年間のボランティアの日々、博物館の展示を通して触れた奈良の文化財・歴史の魅力を、スケッチとともに書き下ろしたエッセイ。ボランティアならではのいきいきとした語り口で、今年遷都一三〇〇年に沸く奈良の都にまつわる、とっておきのエピソードをご紹介します。

◆目次◆

- 第1章 正倉院と奈良時代
- 第2章 天平のおもかげ
- 第3章 奇跡を起こす人々の力
- 第4章 都の文化の広がり
- 第5章 追憶の風景



【10月刊行予定】

▼四六判・三〇〇頁／定価一、六八〇円

正倉院宝物に学ぶ

奈良国立博物館編



日々、宝物の保存と修理に携わる宮内庁正倉院事務所の研究者をはじめ、美術史・仏教・建築・歴史の第一線の研究者による3回のシンポジウムの成果。

▼四六判・四三八頁

定価三、一五〇円

文人世界の光芒と古都奈良

大和の生き字引・水木要太郎

久留島浩・高木博志・高橋一樹編

水木要太郎（一八六五—一九三八）は、奈良女子高等師範学校教授、奈良帝室博物館学芸員などを歴任する一方で、大和地方の歴史・考古・地誌の研究活動を進め、大和古寺の瓦や経典、中世・近世文書、典籍や写本のほか、近世の刊本・刷り物や絵地図・暦本・著名文化人の書簡などを収集した。本書はこの水木コレクションを主な分析の素材とし、日本史学・考古学・建築史学・国文学・美術史学・地理学・社会言語学等にわたる学際的な一書。

▼A5判・五〇八頁／定価八、一九〇円

奈良朝人物列伝『続日本紀』薨卒伝の検討

林陸朗著

『続日本紀』には王臣・僧侶等の死没記事のあとにその人の略伝的な記事を掲げることがある。こうした伝記的な記事を薨卒伝といい、撰者の批評の記事を交えて極めて特色ある史料として注目される。54の全薨卒伝を、現代語訳・訓読・原文・語句解説・考察で構成。

▼A5判・四六八頁／定価七、三五〇円

正倉院展六十回のおゆみ

奈良国立博物館編集・発行



二〇〇八年で六〇回を数え、秋の風物詩となっている正倉院展の歩みを、各回の主な出陳宝物の図版やエピソード・出陳一覧などのデータなどである。また各回の図録巻末の用語解説を整理・集大成して付す。

▼A4判・二八六頁

定価三、一五〇円

——思文閣グループの逸品紹介——

美の縁

び

よすが



真っ赤に熟した柿に齧^かりつく幼子。ふくふくとした愛らしい姿に思わず顔がほころびます。

平田郷陽が人形師であった父の跡を継いだのは、大正一三年二二歳の時でした。まだ若く技術も未熟ながら、一家の大黒柱として懸命に仕事に打ち込み、当時流行し始めたマネキンの制作なども依頼され人気女優のスケッチからマネキンを制作していたといえます。昭和二年アメリカより日本の子供たちに贈られた人形への答礼として、日本からもアメリカ各州へ人形を贈ることとなり、それは京都・東京の人形師による作品から選ば

◆ 熟柿 ◆

平田郷陽

れました。郷陽は無名でありながら上位一位で選ばれ、写実的で生き生きとした活（生）き人形の姿には誰もが驚き一気に注目されるようになりました。

人形作りについて、人形に心が宿ること、物質であっても作品が魂のすみかとなること、これこそが本望であると郷陽は語っています。この作品もまさに生き写しのような見事な技術と、何とも子供らしい一瞬をとらえた郷陽の感性が素晴らしい逸品です。

（思文閣ざやらいい・前田遼子）

思文閣大文化祭

京都出版社まつり

10月29日（金）～31日（日）

- 京都の人文・社会・美術系出版社が一堂に会し書籍を販売
- 各社おすすめの書籍を直接お手に取ってご覧いただけます

☆出品予定出版社☆

海青社／河原書店／京都大学学術出版会／晃洋書房／人文書院／青幻舎／
燈影舎／ナカニシヤ出版／東山書房／平楽寺書店／法藏館／光村推古書院ほか

※出品出版社は今後追加・変更の可能性があります。詳細は10月上旬にホームページでお知らせします。

同時開催

奈良絵本・絵巻 の宇宙展

2010 8.28(土) - 11.7(日) 於：思文閣美術館 月曜休館
(但し祝日は開館、翌火曜日休館)

開館時間：10:00～17:00

入館料：一般 600 円 (500 円) 高大生 400 円 (300 円)

小中生 300 円 (200 円) ※ () 内は前売、10 名以上の団体料金

※10/29(金)、30(土)、31(日)、11/3(祝・水) は無料開館

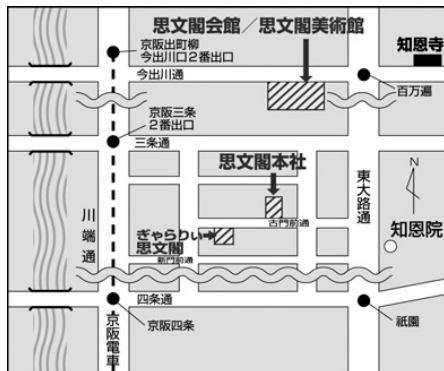
奈良絵本・絵巻の展示即売

10月29日～31日

思文閣出版古書部では、弊社の持つ
奈良絵本・絵巻を一堂展示

※10月31日（日）には、慶應義塾文学部
教授石川透先生によるギャラリートークを
行います

■東山区の(株)思文閣本社・ぎゅらりい思文閣でも、美術品の展示を行います
(京都市東山区古門前通大和大路東元町355) 京阪三条駅徒歩 5 分、京都市バス知恩院前バス停 5 分



会場：思文閣会館

(京都市左京区田中関田町2-7)

- ・京都市バス百万遍バス停すぐ
- ・京阪出町柳駅徒歩15分

百万遍知恩寺にて開催

(思文閣会館から徒歩10分)

秋の古本まつり

10月30日（土）～11月3日（祝）